

大内宿のなりたち

大内宿は、下郷町の38集落の1つであり、町の北側にあつて阿賀川の支流小野川の上流に位置し、ひわだ 桧和田峠・ゆいのう 結能峠・ひだま 市野峠・氷玉峠で会津高田町・会津本郷町・会津若松市に接しており、周囲を山に囲まれた盆地状の標高650メートルに形成された集落である。また、大内地区には、5ヶ所の塚や散布地が発見されている。大内・権現上・火矢陣原遺跡は奈良、平安時代の散布地であるといわれ、古くからこの地に人が住んでいたことがいえます。宿場の形式を記録した資料がないので明記することはできないが、江戸時代の初期に散在していた古内村、宮内村、こうづか 糠塚村を坂本村に集め山本村と称し、後に大内村に改められたといわれています。

◆大内集落周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺物
1	大内宿	大字大内字山本	近世	
2	歳神遺跡	大字大内字歳神	奈良・平安	土師器
3	大内遺跡	大字大内字大谷地	縄文	縄文土器・石器
4	権現上遺跡	大字大内字権現上	縄文	縄文土器
5	火矢陣原遺跡	大字大内字火矢陣原	縄文	縄文土器
6	大内一里塚	大字大内字一里壇	近世	

「宿場 大内」茅葺の家並みより

大内宿と参勤交代の道

会津藩主のうち初代藩主正之、2代藩主正経が、それぞれこの街道で参勤交代をしておりますが、3代以降は、幕府の方針によって脇街道を諸大名が通ることを厳しく取締ったためと、更に天和3年（1683年）に南山通りの往還は中止され東通り（滝沢峠—福良—白河）となり、以後8代藩主容敬が文政10年に通るまで約120年近く、参勤交代の通路ではなかったのです。大内宿は、昼休みの宿になっていましたので初代正之が7回（うち藩主として3回）2代正経が11回、そして8代容敬が1回ここ大内宿を通っています。本陣、脇本陣は、この時に殿様をはじめとし藩の重臣の休む処でありました。参勤交代は、その藩の格式によってその随行人数がきめられております。文政10年8代容敬の時の記録によると、総勢625人となっておりますから、村役人やそれを接待する宿駅の人、あるいは近郷の村人は容易でなかったと想像できます。

会津藩主の参勤交代時における大内宿利用頻度と目的

利用回数	藩主名	年	目的	備考
1	初代 保科 正之	1644（正保元年）	御休(昼食)	江戸参勤
2	同上	1647（正保4年）	同上	帰国
3	同上	1648（慶安元年）	同上	江戸参勤
4	2代 保科 正経	1669（寛文9年）	同上	藩主としてはじめて会津入り
5	保科 正之	1670（寛文10年）	同上	帰国
6	保科 正経	1670（寛文10年）	同上	江戸参勤
7	保科 正之	1670（寛文10年）	同上	参府
8	保科 正経	1671（寛文11年）	同上	帰国
9	保科 正之	1672（寛文12年）	同上	帰国
10	保科 正経	1672（寛文12年）	同上	江戸参勤
11	保科 正之	1672（寛文12年）	同上	参府
12	保科 正経	1674（延宝2年）	同上	江戸参勤
13	同上	1675（延宝3年）	同上	帰国
14	同上	1676（延宝4年）	同上	江戸参勤
15	同上	1677（延宝5年）	同上	帰国
16	同上	1678（延宝6年）	同上	江戸参勤
17	同上	1679（延宝7年）	同上	帰国
18	重四郎	1680（延宝8年）	同上	江戸参勤
19	8代 松平 容敬	1827（文政10年）	同上	帰国

（『大内宿—福島県文化財調査報告書第28集』参照）

歴代藩主名

初代藩主 保科 正之（マサユキ）	2代藩主 保科 正経（マサツネ）
3代藩主 松平 正容（マサタカ）	4代藩主 松平 正容（カタサダ）
5代藩主 松平 容頒（カタノブ）	6代藩主 松平 容住（カタオキ）
7代藩主 松平 容衆（カタヒロ）	8代藩主 松平 容敬（カタタカ）
9代藩主 松平 容保（カタモリ）	

大内宿と西街道

大内宿は、昭和56年4月18日に江戸時代の宿駅制度に基づいてつくられた宿場の形態を良く残す町並みとして「重要伝統的建造物群保存地区」として国の選定を受けました。宿場町としては中山道の妻籠、奈良井に続いて3番目で、保存維持と修理事業が行われています。

町並みの特徴

1. 旧街道の両側にはほぼ均等に割られた屋敷割りである。
2. 主屋は茅葺き寄棟造りで妻を街道に面している配置。
3. 屋敷は二座敷を併置し、街道に面する旧宿駅住居の形式
4. 二座敷の表及びその前後を化粧で飾る軒形式

藩政時代の厳格な町割りによって決められた大内の一軒あたりの屋敷面積は95坪（171㎡）、建坪40坪（約72㎡）の家屋は街道に沿って3尺（約90cm）の縁を付けその前に「オモテ」と呼ばれる3間幅（約5.4m）の広場を設置したことで整然とした町並みが成り立った。

大内は、江戸時代に下野街道の一宿場として栄え、明治以降、交通路の変化により昔の面影を今にとどめています。大内が下野街道の一宿場として形成されたのは、17世紀の初期といわれています。この街道は、すでに鎌倉の時代から会津と関東を結ぶ街道としてかなりの往来がありました。しかし、街道の整備は行きとどいていなかったようです。各地の街道の整備に力を入れたのは戦国の時代からで、全国統一の一環として行われてきました。徳川幕府がこれを継ぎ、五街道の幹線やその付属の諸街道に対して支線の意味で、脇往還、脇道などとも呼ばれていました。下野街道は、1つの脇街道であって幹線に較べると小規模であり、街道も宿駅も不備であったようです。また、大内は若松へは約4里半（16.5km）田島へは5里（20km）当時の1日行程は約8～10里であり、大内宿は中宿にあたり、本街道の間宿にあたり昼食のための休憩の宿場でありました。

大内宿がいつ頃形成されたかははっきりしませんが、同じ街道筋にある川島宿が承応3年（1645年）にできたことから考え、ほぼこれと同じ頃と考えられます。江戸時代の街道整備は、徳川幕府の支配体制の確立と関連しておりこの頃すでに、五街道を初め脇街道なども整備されました。江戸時代には、江戸と会津（ちなみに若松～江戸間は61里約244km）を結ぶ街道で宿場としては重要な役割を果たしておりました。また、大内を通るこの街道（下野街道）は、相当古い時代から人の往来があり、天正18年（1590年）8月、豊臣秀吉が会津平定の帰りに通っているそうですが、未だその時は街道としての形はなしてなかったようです。

会津五街道

①	米沢街道	米沢城下（山形県）とを結ぶ北の街道
②	白河街道	白河城下とをつなぐ南東へ延びる街道
③	下野街道（南山通り）	下野の国（栃木県）今市を目指し南へ延びる街道
④	二本松街道	本宮から二本松に東へ向かう街道
⑤	越後街道	越後の国（新潟県）を目指す西への街道

大内宿峠の茶屋

藩主一行の大内宿での昼食を見ると、本陣で出された献立は、砂鉢（うこぎ）、重物（しいたけ、きくらげ、すず子、わらび、里いも）、8寸砂鉢（いわなの焼きびたし、しょうが）、吸い物（浜焼き、せんとろふ）と記されており、出された食べ物は全て土地の物で質素であったことが伺えます。資料からも大内峠に茶屋があったことは確認できましたが、大内集落においても茶屋の存在は語り継がれてきました。その発掘調査を実施したところ、峠の茶屋は、礎石の配置から同一場所に初期の建物と時を経た建物の二棟が存在し、初期の建物が桁行6間、梁行4間半であるのに対し、後期の建物は桁行・梁行ともに3間半となり、初期建物の西北側に建てられていました。

下野街道の概要

会津若松から会津藩領と南山御蔵入り領を分ける大内峠（標高 920m）陸奥国（青森県）と下野国（栃木県）の分水嶺山王峠（標高 906m）を超えて日光領、今市宿に、32 里（128Km）の道程であり、街道は多くの呼び名をもっている。会津藩の公式記録である『家世寛記』（1631～1806 年）は主に「南山通り、南通り」を用い「川路通り」も使われている。17 世紀後半の「会津風土記」では「下野路」と呼び 19 世紀の「新編会津風土記」では、これを「下野街道」と記録している。江戸では、この街道「会津街道、会津西街道」と呼び、広義で越後街道の一部としていた。

また、この街道の間である幕府領の南山地方では「日光街道」や「会津西街道」と呼び、下野国では稀に「中奥街道」と呼んだ例もある。街道の呼び名は、その行く先を告げるものでもあることから、その地方によって異なった呼び方をされている。平成 14 年 3 月 19 日に三群境の塚からなごほら檀原宿跡まで一部の 9630.3m が国史跡の下野街道として指定された。

1179 年	平安末期	打倒平家の挙兵に失敗した高倉宮（以仁王）の逃避行伝説
1590 年	天正 18 年	小田原参陣の折、伊達政宗が通る。 奥州仕置きを命じた豊臣秀吉は 8 月 13 日会津の黒川城を発ち京都に帰る折通る。
1852 年	嘉永 5 年	吉田 松陰が通る。（東北旅日記）
1644 年 ～ 1680 年	正保元年 延宝 8 年	初代会津藩主保科正之公、二代藩主正経公の時代には参勤交代で 21 回通る。
1683 年	天和 3 年	地震により一時不通になる。
1720 年	享保 5 年	大内宿の「手鑑」（村政要覧にあたるもの）に『当村儀若松より江戸までの馬継ぎにて商人衆少々通り申候得共左程にぎわいのところと申し上程には御座無候』との記述あり。
1761 年	宝歴 11 年	幕府の奥羽松前巡見使「山道険阻地」と書き記す。
1789 年	天明 8 年	当時の有名な地理学者、古川古松軒が幕府の巡見使に随行して大内宿に宿泊する。
1855 年	安政 2 年	大内宿の「手鑑」の記述。『若松御城下り日光に江戸表への御道に御座候、越後・新発田・並米沢・庄内所々御藩中折々御道に相成申候』とあり、幕末まで各藩の侍の通行があった。
1868 年	慶応 4 年	8 月、西軍が沼山で会津軍を破り大内村に進軍。会津軍との激戦の場となる。
1878 年	明治 11 年	イザベラ・バード（イギリスの旅行家）が通り、1880 年に「日本奥地紀行」を出版。
1884 年	明治 17 年	会津街道（新道）開通により交通が途絶える。

紅梅御前宮と桜木姫の墓

高倉^{もちひと}以仁王の妃の紅梅御前と、侍女の桜木姫（橘詰安の娘）をその供の者たちが高倉以仁王の後を追ってきた。彼女らは、白河の関より岩瀬郡の風坂峠や蟬峠の難所をかけてようやくのことで大内村にたどり着いた。しかし、無情なことに以仁王はひと足違いで越後へと西進された後であった。恋しい王の後を追ってようやくのことで戸右衛門宅にお着きになった妃たちは、長旅の疲れと、王には遂に逢えない絶望の気持ちとで眼の前から急に光明の消えたような思いであった。そして、8月26日、もともと病弱であった侍女の桜木姫はこの地においてにわかになら病没された。姫の哀れさも去ることながら、もっとも力を落とし悲観にくれたのは紅梅御前であった。

紅梅御前は高野大納言^{としなり}俊成の息女で、^{たちばな}橘姫と申し上げた。以仁王の中宮で御年17歳。お供には堀八十次と岩瀬小藤太という者がつきそってきたが、堀八十次は、岩瀬郡風坂峠の麓の田ノ内村というところで長旅の苦労がもとで病死した。それからは小藤太一人でお護りしてきたが、8月24日、大内の宿に着いたときには王はすでに越後に向けて旅立たれた後であり26日にはまた侍女の桜木姫と別れなければならなかった。妃は深い悲しみのなかにあって小藤太を伴われ、高倉宮の通られた道筋をたどって戸石村の五郎兵衛宅を訪ねられたが、このとき妃は臨月の身で心身の疲労は深く、遂に床上に臥す身となられたのである。そして、王にお逢いになれないままあの世に先立つことの悲しみを切々と小藤太に訴えながら、28日の明け方、これまた逝去なされたのであった。

小藤太は泣く泣く高倉宮の落ちて行かれた越路なる小国の郷に跡を追い、重なる悲報を伝えた。王は深い悲しみをもって乙部右衛門左を御名代に、紅梅御前と桜木姫の零を弔うべき旨を仰せつけられた。

乙部は9月15日に伊北郷檜戸の竜王院にたどり着き、姫君たちの供養をした。それから、竜王院の山伏も同道して9月21日に戸石村に入り、五郎兵衛宅に宿泊、紅梅御前のため祠を造り、竜王院の加持で御前霊社をしてお祀りした。

この祠は今も戸赤の溪流をへだてた岸边に祀られている。この溪流を里人らは悲嘆の極に亡くなられた紅梅御前をしのんで姫川と呼んでいるが、御前の墓と村との間には橋がない。幾度橋を架けても、一夜の雨で流されてしまうのだそうである。人目をさけての憂き旅に、子も生めずあの世に旅たっていった妃の誰にも逢いたくないという心情を汲んで自然は橋を流してしまうものだと村人らは言い伝えている。

ところで、紅梅御前の霊をねんごろに祀った乙部は24日大内に入り、戸右衛門宅に2、3日逗留し、桜木姫の塚に桜の木を1本植え、竜王院の加持でここにも桜木霊社をお祀りした。現在、桜木姫の墓は大内より氷玉峠にかかる道端に長旅の途次での悲しい死をあらわすかのように、ぼつねんと立っている。この台地状の原を里人らは御側ヶ原と呼んでいたが今は畑地となった。昔は墓碑の傍らに桜の古木が植えてあったが今は枯れ、それに代わって若い桜の木が墓の左右に植えてある。また水抜の上手には桜木姫の衣装塚というのが残されており、今に人々の哀れをさそう。姫の素性については、不詳だが、一説には橘諸安の娘と言われている。

高倉宮潜行伝説と高倉神社

高倉宮は以仁王と言われ、後白河天皇の第3皇子である。平清盛全盛期の治承4年（1180年）源頼政のすすめで、諸国にいる源氏と延暦寺の反平家勢力をあてに挙兵しました。だが、この計画は予想よりも早く発覚し、6月24日に京都宇治川で合戦となった。源頼政は討ち死にし、高倉宮は行方不明。また、流れ矢にあたって戦死したとも言われていて、伝説はここから始まる。そして、伝説はロマンを秘めた歴史的背景と伝承遺跡などと共に村人に深く根付いて語り伝えられている。

伝説によれば宇治川で敗れた宮は、奈良路から近江（滋賀県）・東海道・甲斐（山梨県）・信濃（長野県）・上州沼田（群馬県沼田市）・尾瀬（群馬県利根郡）・桧枝岐・伊南・大内・只見を通して越後（新潟県）入り、小川荘中山村（東浦原群上川村）で死去されたことになっています。宮は20人ほどの供を連れて、越後国に住む小国右馬頭頼之を頼りに落ちのびてきたが、大内に立ち寄り、この里が都の風情に良く似ている所から、それまで山本村と呼ばれていたものを大内村と改めました。世話になった戸右衛門という人に、御墨付きを御下賜になられた。出発のとき「高峰の風吹き返す山本に、心とどめし道しるべして」と詠われた。宮は、戸右衛門の案内で、戸石村の五郎兵衛方に泊まり、駒止峠を通過して西部に入り、南郷村から只見町を経て越後に落ちのびていった。また、大内にある高倉神社とは平清盛との戦いに敗れた高倉以仁王と王の愛馬である名馬、連銭葦毛を祀った神社である。

下は逃れる途中にこの地に留まり都をしので詠まれた歌

「春は桜 秋はもみじの にしき山 あづまの都 大内の里」
から大内の名がついたと伝えられている。

高倉神社の大スギ

(福島県の緑の文化財登録第 405 号)

所在地	南会津郡下郷町大字大内字大谷地
所有者（管理者）	大内区
樹齡	約 800 年
樹高	56m
胸高周囲	4.3m
科名	スギ
樹種	スギ

本神社は、仁皇第八十代高倉天皇と皇弟高倉宮茂仁親王を祭神として治承 4 年（1180 年）に創立されたと伝えられている。このスギはその頃兼献植されたものいわれ、樹齡約 800 年の老杉である。樹勢は良好である。

戊辰戦争と大内宿

大内での会津藩と西軍の戦いは激戦を極めたといわれます。西軍は三斗小屋を通り大峠から会津に入り、松川から田島への道を取り、山王峠を超えてきた西軍と合流しました。そして、この街道沿いに進撃し、倉谷から桜山に攻め入り、沼山での激戦を経て大内に入ってきました。大内へ結集した西軍は30日、佐藤新八郎宅を本陣とし、正法寺を兵糧役場兼救護所に陣を構えた。翌9月1日追分沼周辺で両軍の合戦があり、多数の戦死者を出し会津軍は敗退した。大内村の名主4代目阿部大五郎は、大内宿を両軍の焼き討ちから守るため、両軍の将と掛け合い村を救ったと言われる。

戦死24人墓

慶応4年(1868年)、戊辰戦争で命を落とした西軍死者の墓碑がたっています。以前は大内沼の畔にありましたが、大内ダムの建設に伴い現在の地に移されました。

これより南には大内村の墓地にも笹沼金吾という会津藩士の墓がひっそりと建っています。会津軍が大内を退いたあとも1人水車小屋に身をひそめて戦い、銃弾を受けた遺体はそのままだにさらされ、これを哀れんだ村人がひそかに葬ったと伝えられています。

大内半夏まつり

高倉宮は、後白河天皇第2皇子でありながら、親王の宣下が得られず、王にとどまった悲運の皇子であった。三条高倉に住んでいたのが高倉宮と呼ばれた。治承4年(1180年)4月源頼政の勧めで、諸国の源氏に平氏討伐のりょうじ令旨を發して兵を挙げたが、6月24日平知盛と宇治川で戦い、敗れて行方不明になったといわれている。だが落ち延びて南会津地方を通ったという伝承もある。高倉神社は高倉以仁王の霊を祀る高倉神社の祭礼は、夏至から数えて11日目の半夏生(はんげしょう)の日に行われるので「半夏まつり」と呼ばれている。もとは宮の命日とされる旧5月19日であったが、5、6月の農繁期を避けて、明治20年頃から7月2日に変更となり現在に至っている。

高倉神社は、大内をはじめ栄富・三ツ井・新開・戸赤・白岩・中山の七ヵ村の総鎮守で、約200戸の氏子に支えられてきたが、今は大内集落の氏子のみにより祭礼は執り行われる。祭礼は御頭屋(おとや)が中心となって行われる。御頭屋は、田島の田出宇賀神社の祭礼が廻りで行われるのに対し、大内では、『御伝記』にもあるとおり、高倉宮が草註を脱いだ宿が佐藤戸右衛門家であることから佐藤家永代頭屋となっている。この永代御頭屋を中心に神社総代、区長、神職が祭礼を司祭する。これに青年会が^{みこしとぎょくほう}神輿渡御供奉として加わる。

祭礼は前日の7月1日の宵祭りから始まる。この日は氏子全戸が出て、神社境内、参道の清掃や御手洗場の杉垣造り、鳥居の^{しめなわ}注縄ない、旗立てなどの奉仕をする。各家では、「高倉神社祭礼」と書いた祭旗を立てる。大概のおまつりでは、集落の外れや神社の入口に祭旗を立てるのが普通だが、大内では、各家々でも3本から4本の祭旗を立てる、旗を揚げることは「お祝いをあげる」ことに通じるので、できるかぎり多くの旗を揚げ、まつりを盛り上げるのである。夜8時頃になると氏子は再び神社に集まる。宮前の御手洗場で口を^{そそぎ}雪ぎ禊齋の後、拝殿で宮司の^{しゅうばつ}修祓を受ける。そして、次の日の役付の割出しが行われる。この行事は〈お籠り〉と呼ばれ、かつては明け方まで続いたといわれる。

7月2日午前11時に、本まつり開始の太鼓が鳴ると、いずれも麻の^{かみしも}袴を着用した永代頭屋、神社総代4名、区長、青年会長の神職が神社に集合し、拝殿に向かい合って座る。まず、修祓のうち、笛・太鼓の雅楽手が雅楽を演奏するなか、神前に神酒・米・塩・魚・野菜・卵を^{けんぜん}献饌する。そして祝詞、玉串奉典を行い、神酒を酌交して神前での神祭りは終わる。この間社前においては、青年会などの行列供奉者達は、おのおの^{くさわらじ}草鞋を履き、白装束、烏帽子に着替え、出発を待っている。御神霊が還座された神輿は、神没から社前の神輿供奉者に渡され、前夜に決められた行列順序どおりに整列し出発する。渡御行列は、御獅子を先頭に、鉾の杖を持った前駆、大太鼓2人、高下駄をはいた猿田彦（日本神話で道案内の役割をした神）、榲で塩水をふりかけ祓いながら歩く^{えんとう}塩湯司、^{おおぐさ}大麻、神官、社名旗、^{おんほこ}御鉾、大弓、弓矢（子供役）、御唐櫃、御神馬、御立傘、御刀、御沓持（子供役）、左大臣2人、右大臣2人、高倉宮御神輿8人、四神旗と続き、この後に社総代、氏子、大拍子、笛を持った楽人が続く。総勢60人。

神社から出た行列は、1つの鳥居のところで待っていた花屋台と合流し、村の中央の道を北に向かう。この花屋台の山車を加えた行列は、京都の伏見稻荷のまつりの型をとったものと伝える。花屋台は、^{そうし}囃子方の男性のほかは、数少ない集落のため、婦人達と子供が中心となる。それでも威勢よく「ヤッカショー、ヤッカショー、」と掛け声をかけながら行列に従って行く。

行列最先頭の獅子頭は、悪魔を祓う役割をもち、家々の縁側に立ち寄り、行列を待ち受けている家の家族の頭を噛む真似をする。身体の邪気を祓い、息災に暮らせるようにとの願いを込めている。

行列は弁天様や塞の神が祀られている十字路で折り返し、最初の御旅所の永代頭屋佐藤家で休憩する。御旅所は、四方に檜の木を立て、注連縄をめぐらし、その中に杉の台を置き、復興を安置する。屋号を玉屋と呼ぶ佐藤家は、道路に面して上の座敷と下の座敷があり、上の座敷の奥行3尺（90cm）の床の間には、『高倉宮御伝記』が半開きにして供えられている。座敷には、神役、神職達の膳部も準備されており、ここで供奉員一同も昼食となる。昼食が済むと行列は集落の下手に向かう。各家では身なりを整えて、道に面した座敷前の縁側に座り、神輿渡御行列をじっと眺めている。

行列はこの後区長宅、集落入口の南仙院を御旅所として休んだ後、日も傾くころ、神輿は神社に帰る。参列者が社殿に登ると『高砂』の謡いがあり、御神体を御輿から神社に戻して半夏まつりは終了する。

大内宿雪まつり

大内雪まつりは昭和61年(1986年)2月に行われ、旧本陣跡を中心に多彩な催しが行われ、大内半夏まつりと並び大内二大まつりの一つとして数えられます。毎年2月の第2土日に行われ、深雪の大内宿をPRするのに一役かっています。また、格々の家の前に手作りの雪灯籠が作られ、夜になると真っ白な雪灯籠の中にほのかなろうそくの灯りがとまり、幻想的に大内宿を浮かび上がらせます。

大内宿プログラム一覧(平成23年開催プログラム)

【行事】

時刻	予定	
	1日目	2日目
9時30分	X	わらじ履き綱引き大会
10時40分		大川溪流太鼓演奏
11時30分		そば食い競争
13時00分	大内宿雪まつり開会式	時代風俗仮装大会
13時30分	日本一の団子さし	↓
14時00分	具止餅拾い	↓
14時30分	「郷人」よさこい	↓
15時00分	↓	表彰式・閉会式
15時15分	三志神楽	X
16時00分	ボタ引き競争	
17時00分	きき酒大会	
18時00分	御神火載火・花火大会	

大内峠一里塚

会津藩主保科正之は、城下町並びに沿道の宿駅に対し、区間を定めてその管理と普請の役を課し、寛文7年(1667年)4月1日からは、一里(約4km)を36町とし、街道筋には、一里塚を築かせた。この大内峠一里塚は、会津城下「大町礼の辻」から5里(約20km)の場所にあり、街道の両側に「対」で残っている。当時築かれた塚の大きさは、現存する他の一里塚から推測して、高さ3メートル、周囲約20メートルで、塚の上には^{えのき}榎か松が植えてあり、交通・運輸の上で正確な目標ができ、往来いっそう便利にさせた。

大内宿南一里塚

会津城下「大町の辻」から、6番目の一里塚で今は街道北側に片側だけが残っている。以前は「対」であった。

大内ダム

大内ダム(大内調整池)は電源開発(株)下郷発電所の大川ダムの水を揚水し、有効落差387メートルを利用し発電する揚水式ダムである。昭和62年(1987年)6月^{たんすい}湛水開始した人造湖で、高さは102メートル、堤表340メートル、ダム頂幅10メートル、そして、大内調整池は満水位標高792メートル、利用水深30メートル、貯水面積70.5ヘクタール、有効貯水量は1600万立方メートルとなっている。下池(大川ダム)より揚水して貯水し、必要に応じて落差(基準有効落差387メートル)を利用して発電され、最大出力100万キロワットの発電が可能なダムである。

近世にはこの池に沼があり、^{おいわけ}追分沼と呼ばれていた。慶応四年(1868年)の会津戊辰戦争の戦場となった沼の近くには、西軍戦死の墓碑が残されている。近年には大内沼と呼ばれ、養魚なども行われていた。また、大内ダムの周遊は6kmほどあり、桜が植えられている。

大内の自然用水

ここ大内宿は、江戸時代の宿場を今に残す全国でも数少ない集落のひとつ。

ここ大内宿を通る街道は、会津西街道又は南山通りと呼ばれ、城下町会津若松と栃木県今市市を結ぶ。その昔、参勤交代の大名行列や数万俵の廻米などのほか、旅人なども通る交通要所だった。その会津西街道沿いに用水路があり、山からの自然水を取り入れ、生活用水として利用されてきた。山間にひっそりとたたずむ大内宿は、昭和56年（1981年）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、江戸時代の町並みが再現されている。

江戸時代から現代まで、大内宿の人々の生活を支えている自然水の流れは、その町並みと共に旅人を数百年前のタイムトリップに誘ってくれる。

元々は、中央を流れていたが明治以降生活の便宜性から道の両側に移動された。

「チョボ、ジョボ、ジョボ・・・ゴボッ、ゴボ」

ひそかにたたずむ村を支える自然水の清らかな流れ

〈よく聞ける時期〉

1年中、いつでも

〈よく聞けるところ〉

大内宿全域

鏡沼の伝説

当町の東南方、那須岳への途中で鏡沼という不気味な沼があります。岩に囲まれた周囲がおよそ 500m、深さ 17.8m ほどの手鏡をした沼で、下野との国境の秘奥^{ひおう}にあります。沼の王は大蛇だと伝わっています。

【鏡沼の大蛇】

鏡沼は水底がよどんで青黒く、まわりを小高い丘が囲んで、そよ吹く風ではさざ波一つたたない。ある時、南倉沢の猟師が、その辺りの山に猟に出かけた。良く晴れた日で山から山へ、そして尾根を越えて獲物を探した。しかしその日は兎一匹も出て来ず、仕方なく帰ろうとして途中鏡沼のほとりを通りかかった。ふと見ると、沼に差し出た木の股に白いものが見えた。その日の不猟のこともあって、これはよい獲物とばかりねらいを定めたが、よく見ると、何とそれは女の裸身。アッと気付いたものもう遅い、すでに引き金を引いてしまった。弾丸がその女体に命中したかと思うと、その姿はその場からかき消えて、みるみる大蛇と化して沼の中に逃げ失せた。すると、たつまちあたり一面闇黒に包まれ、天空妖雲たれ込め、なまぐさい霧とも何ともつかぬもやもやが身边を覆い、視界は全くきかなくなってしまった。

猟師は途方に暮れたが、家路の方角と見定めて歩き出したところ、行けども行けども霧はますます深く、目標とて何一つ見えない。三日三晩歩き疲れてやっとたどり着いた小屋は、村から遠く離れた幽谷であった。沼の主の大蛇を討った猟師の家には、やがてあたりがあるだろうと噂されていたが、その当座は何事も起こらなかった。

その後、猟師の家では、鏡沼には決して近づかなかった。そして罪障消滅の祈りを怠らず、代々信心深い日常を送り、もちろん鉄砲打ちはやめてしまった。

村の人々は、その討たれた大蛇の主、大木の枝に登り女人の裸形となって、沼の水鏡に自分の心身を映していたのだらうと語り伝えている。

【鏡ヶ沼の怪】

昔、南会津の山奥に大蔵という狩人がいた。ある日大蔵は、愛犬を連れて三本槍ヶ岳へ鹿狩りに出かけた、その日はことのほか霧が深く、山に慣れている筈の大蔵も不覚にも道に迷ってしまった。大蔵はしかたなく、沢伝いに山を下ってくるとやがて大きな沼の畔に出た。

大蔵は狩人の直感で、鹿は必ず沼辺にやって来るに違いないと思ったので、銃に弾丸をこめると蛙の皮で作った笛を携えていて、この笛で鹿を呼び寄せていた。大蔵が笛を吹くと、周囲に重くよどんでいた霧はスーッと流れ出した。と、沼の真っ只中に全裸になって水浴びしている美女の姿が、ポーッと現れた。大蔵はびっくりして思わずかたづをのんで見ていると、女は水に濡れた黒髪を両手で絞りながら、こびるような眼差しを大蔵の方に向けて、ニッと笑った。熊と格闘してもひるまない豪の者の大蔵ではあったが、女の艶やかな裸体をまのあたりに見ては、しばし生つばを飲み込むばかりであった。

するとその時、愛犬が猛然と吠え出した。ただならぬ気配にハッと我に返った大蔵は、こんな美しい女が水浴びしている筈がない。あれはきっと魔性の者と気を取り直し、素早く銃を構えると、一発、ダガンとぶっ放してやった。弾丸は狙いだがわず、女の胸を貫いたはずと見てやると、女はなんと、ケタケタと笑っているではないか。これはまごうかたなく、魔性の者に違いない。大蔵はなおも二発、三発とぶっ放してやった。するとこれはまたどうしたことか、一天にわかには掻き曇り、大風が吹き出したかと思うと、青白い稲妻が走り、ドロドロと雷鳴が轟き、天の底が抜けたかと思うほどの豪雨が襲ってきた。そして、そのものすごい光景の中で、裸体の女の姿はみるみるうちに一匹の青白い大蛇の姿に変わっていった。これにはさすがの大蔵も終身栗肌となり、ワナワナと震えだし、犬もまた、おびえ狂ったかのように吠えだした。大蔵は、もう夢中になって逃げ出した。沢から沢へ、転がるようにして逃げた。逃げる途中で足を取られ、水溜りの中に転げ込んだ。ところがその水溜りは、湯のように温かかった。しかし、そんなことに気を取られているような余裕は今の大蔵にはなかった。大蔵はただ恐ろしいの一念で、その水溜りならぬ湯溜りから這い上がると再び走り続けた。そして、その日もようよう日暮の頃になって、ようやくのことで一軒の農家にだどり着くことが出来た。大蔵は事の一件を話し、その家の主人に救いを求めた。するとその主人はカンラカンラと笑いながわ、「そんな筈はねえ、今日は朝からずうっとよい天気でした。あんたは性の悪い狐か貉にでも化かされなすったんだべ。」と言って、てんでとり合っはくれなかった。それでも大蔵は、その夜はその農家に泊めてもらい、翌日、我が家へと帰って来た。我が家に帰ってきた大蔵は、今までの疲れがいつぱいに出たのか死んだようになって眠りこけ、数日も経ってからようやくのことで眠りから覚めた。そして炉端に出てきて火にあたろうとすると、目の前に自在かぎに小さな蛇が無数にとりついて、縄のようにもつれあっている。驚いた大蔵は、「ヒャーッ、蛇が、蛇が・・・」舌が引きつったような叫び声をあげた。その声を聞きつけて、家の者たちが駆けつけて来た。しかし家の者たちの目には、蛇の姿は一向に見えなかった。それからというもの、大蔵は自在かぎを見たと蛇がいる、蛇がいると言って狂ったように叫びだすようになった。大蔵は、まさに狂人になってしまったかのようなのであった。家の者たちは心配のあまり、山伏を呼んで祈祷してもらったところ、「これは沼の主が殺されたので、子蛇の恨みが目に映るのじゃ。一日も早く、沼の主を祀るが良かろう。」との事であった。家の者たちは早速沼に程近い大峠かぎに石の祠を造って沼の主の霊を慰め、沼の主が女の姿で姿を現したところから、その名もお仙の宮と名付けてやった。するとそれからというもの、大蔵も子蛇の姿を見ることはなくなり、再びもとのたくましい狩人大蔵の姿に戻ったという。

大蔵が狩に行った三本槍ヶ岳という山は、福島県と栃木県との県境にある標高 1916.9m の山で、大蛇を撃ち殺した沼というのはその北方約 1 キロ余のところにある鏡ヶ沼（南会津郡下郷町）のことである。そして大蔵が転んだときの水溜りが温かかったというのは、その近くで温泉が葺き出していたからであった。この温泉はのちに開かれて甲子温泉（西白河郡）となり、奥日光国立公園北端の一角に組み込まれている。大峠に至る林道が通っているだけで、今でもいくのは容易ではない。

中山の大ケヤキ

(福島県の県の緑の文化財登録第 406 号)

● 所在地	南会津郡下郷町大字中山字中平
● 所有者(管理者)	二宮 仁
● 樹齡	約 1000 年
● 樹高	36m
● 胸高周囲	12m
● 科名	ニレ
● 樹種	ケヤキ

このケヤキには次のような故事がある「天喜3年(1055年)仁皇七十代後冷泉天皇の御代、八幡太郎義家が陸奥の豪族安部貞任を討伐の折、險路でなかなか進めず、中倉村の役人二宮太郎兵衛宅に休憩した。二宮氏は手厚く接待をして大沼郡の尾岐村に至る間道を教えた。八幡太郎義家は大いに喜び謝礼のしるしに庭先にケヤキを植えた」と伝えられる。

樹形の良さは県内屈指で豪壮雄大王者の風格がある見事なケヤキの巨樹である。

御霊平の大カラマツ

(福島県の緑の文化財登録第 404 号)

● 所在地	南会津郡下郷町大字高隣字大谷地
● 所有者（管理者）	芦ノ原区
● 樹齢	約 500 年
● 樹高	一本目 43m・二本目 41m
● 胸高周囲	一本目 4.4m・二本目 4.1m
● 科名	マツ
● 樹種	カラマツ

本神社は縁起によれば、崇道天皇、伊與親皇、文屋父丸、藤原大夫人、吉備大臣を祭神として室町時代に創立されたといわれ、その頃に献植されたものとすれば、樹齢は約 500 年と推定される。樹勢は良好でカラマツには珍しい大木である。

へいほう石

〈注1〉

「新編会津風土記」によると檜原村の頃に「村の戌亥の方三十間に館跡あり。天正（戦国時代）頃、長沼の巨星蕃某という者住めりという。土居なお存す。」

口碑によると大竹玄蕃は怪力男で、ある日加藤谷川の仕事の帰りの川原より丸い大石（直径60cm・重さ120kg）を2個みつけ、へいほう（お手玉）をつきながら村に帰り、村人を驚かせた。

〈注1〉 戌亥・・・北西の方向

大竹玄番、関東の出稼ぎ先から大峠を越え、三斗小屋道をトボトボと故郷檜原へ帰る途中、加藤谷川原で直径50cmほどの、安山岩の丸石を二個見つけて「稼ぎは少なかったが、せめて村の奴らをたまがして見べえ」※1と、その石二つを両手に軽々しく持ち上げてへいほうをつきながら村まで持って来た。記念にと軒場に並べて「これ金の玉ならば、力のない奴ばらにしてでも盗んでなくせべえがなあ」※2と時々独りで笑んでいた。

ところが石でもやっぱり盗まれた。明治16年新県道開設のとき、その一つを石屋が打ち割って、道路の石垣に積み込んでしまった。これを見ていた心ある人がとめたので、一つは助かって無事残った。生家より道路をへだてた向かいの家の軒端に厳然として、今に保存されている。

玄番の墓碑は檜原の円福寺にあり、戒名は「一誉道教居士」慶安元年壬子十月二十九日寂（1648年）となっている。

※1 「稼ぎは少なかったが、せめて村の奴らをびっくりさせてやろう」

※2 「これが金の玉なら、力のない奴がばらにしてでも盗んでいくだろうがなあ」

円福寺の大ケヤキ・シャクナゲ

(福島県の緑の文化財登録第 402・403 号)

◆ 大ケヤキ (第 402 号)

- 樹齡 約 500 年
- 樹高 31.0 m
- 胸高周囲 610 m
- 科名 ニレ
- 樹種 ケヤキ

本寺は阿弥陀如来を本尊とし、慈覚大師を開祖として嘉祥元年(848年)に創立された。樹齡は約500年と推定される。文政年間(1818~1830年)の火災で表皮の一部を焼失したが、現在樹勢は良好である。

◆ シャクナゲ (第 403 号)

- 所在地 南会津郡下郷町大字豊成字檜原 2310
- 所有者(管理者) 円福寺
- 樹齡 約 150 年
- 樹高 3.0 m
- 胸高周囲 1200 cm
- 科名 シャクナゲ
- 樹種 アズマシャクナゲ

明治30年(1897年)に先代の住職が下郷町の山林より山取り移植したもので、樹齡は約150年と推定される。開花時は5株が一斉に咲き乱れ華麗である。

5株のうち1株が樹勢やや衰弱しているものの他は良好である。

小野観音堂

小野観音堂は、曹洞宗で11面観世音菩薩をこの地に遷し建立したものであり、大慈殿観音堂といえます。縁結びと安産の御利益があるとされています。

- 所在地／下郷町大字湯野上字堂後甲386

【建立時代】

現在の小野観音堂は、文化10年（1813）門田町北青木の祥雲山善竜寺隠居、徳明叟の観化により再建されたものである。大雄徳明和尚は、御蔵入り小出組湯原村の百姓弥次右衛門の子として生まれ、幼くして仏門に入り、熱塩示現寺の謙巖秀禅を師と仰ぎ安永年間（1772～81）には塩原村にあった、賈洞宗板蔵山高福寺の第5代住持となっている。その後、坂下の定林寺住職を経て善竜寺の堂宇の整備（山門の建立など）はもとより、特に「産子養育」に力を注ぎ、寛政3年（1791）には藩から褒美として銀子5枚が与えられている。なお得明は、文政2年（1819）に没しているが彼の作った歌に“手毬歌”などがある。

【建築様式】

唐様（禅宗様）円柱方三間寄棟作りで、擬宝珠高欄回縁がめぐり、正面に対の花頭窓を据え、四隅の軒の気魄に富む斗拱や木鼻の牡丹雲形彫等がよく保存されている。

室内では高さ100cm、横240cm、奥行き140cmの須弥壇があります。総檜造りで、典型的な禅宗様式は観る人の眼を引き付けている。須弥壇の正面左右には、釈迦牟尼仏の弟子で仏法を守護する十六羅漢像が安置されており、室内右奥には、観音堂再建に尽力された大雄徳明禅師の坐象が据えられている。

小野観音堂は、御蔵入三十三観音第十番礼所でもある。

御詠歌に

おのづから たのみをかくる 観世音
みちびき給い 知るも知らぬも

の御詠歌があり、縁結びや安産子育ての観音として、会津全域や岩瀬郡からの参詣者が絶えなかった。

中ノ沢観音堂

この堂の由来については、大同2年(807年)会津仏教の始祖徳一上人によって寺院が開かれたと言われ、寛永年間にこの地にあった真言宗中沢山正光寺が廃絶した「新編会津風土記」は伝えています。

- 所在地/下郷町大字中妻字観音前228

【建立時代】

観音堂の建立時代については、棟札、文献資料等明らかなものはありませんが、様式手法によりみて室町初期だと考えられます。解体修理の祭に判明したことですが、柱礎石に焼損をうけたものがあり、発掘の結果、焼土層及び旧礎石跡が発見された事又、平安時代の作と推定される一木造りの本尊聖観音立像が焼損を受けていること、更に脇侍不動明王の光背裏面に^{かきょう}嘉慶2年(1388)の年号を含む墨書銘がある事などから、平安時代に建立された観音堂が消失したのを受け、室町時代の初期頃、旧道と同じ規模に再建され、脇侍不動明王は堂の建立と同時期に造立されたものと考えられる。昭和35年国の重要文化財に指定された。

【建築様式】

観音堂は平安時代より発生し、今日全国各地に残像するいわゆる阿弥陀堂建築の1つである。この方三間寄棟造のスタイルを持つ観音堂は会津地方にしては数少ない純粹の和様建築の1つである。床組みを始め各部の構造形式、部材に古い形式を残しているが、平面計画において内陳柱間寸法が側廻り中央間比べ広い、造り付けの厨子、^{しゃみだん}須弥壇がある等時代が降る点もある。また、この観音堂は釘が1本の使用されていないのが特徴である。

中ノ沢観音堂は、御蔵入り三十三観音観音巡礼地の第十一番礼所として、往時より巡礼する信者が絶えなかった。

御詠歌に

中つまと 尋ねきぬれば 中之沢

我が世の中の ちかいたのもし

とあり、今でも中妻では仏事に西国三十三観音御詠歌・信濃善光寺御詠歌と共に、中ノ沢観音堂御詠歌を献詠している。

獄観音堂

現在の堂宇は、明治25年（1892）に、学円寺住職の発願によって、910余円の浄財を募り建て替えられたものである。

- 所在地／下郷町大字南倉沢字観音平839番地

【建立時代】

寛文3年（1663年）に建立された観音堂は（2間4面）ほどの大きさであった。

【建築様式】

正面に軒唐破風のきから は ふをあげた向拝こうはいが付き、擬宝珠高欄ぎぼしこうらんのついた回縁を配し、主屋の柱上には台輪たいりんを据え、二手先の斗拱とりよう、唐様2軒繁しげたるき、屋根は照り屋根の方形造になっている。向拝の海老虹梁えびにじりょう、欄間の竜と波、鳳凰を大きく据えた唐破風げきよの懸魚げぎよなど流麗な彫刻が人目を引く。本尊は木造聖観音立像で、像高1尺1寸5分、本尊の両側には12神将が配されていたが、現在では一部欠けている。また、堂の入口には仁王堂がある。天保13年（1842年）この門は三間一戸形式の八脚門で、門全体が8本の柱で支えられている。向って右が、密迹金剛みつしやくこんこうで口を開いている（阿形）。左が口を閉じた、那羅延金剛ならえんこんこう（吽形）で阿吽の呼吸を表していると言われている。

【由緒沿革】

村より南に観音山があり、その半腹に、東西三間、南北五間、高さ9尺の巖窟があります。その中に3尺4面の社壇があり、御長け1尺1寸5分の観音立像が祀られていました。この観音は空海（弘法大師774年～835年平安時代前期の真言宗僧）が彫刻したもので、脇侍は勢至菩薩と普賢菩薩の二尊があり、御長けは7寸あります。これ因に獄観音堂と云っています。7年以前（万治2年（1659年）2月30日）の大地震により、山が崩れ、参道を塞ぎ参拝が難しくなりました。そこで、観音山半腹の堂により西のほうにある、野際の沼端に、寛文3年観音堂を建立し、同年の6月27日には御入仏をしました。

御蔵入三十三観音の第十三番札所にもなっており

御詠歌に

はるばると のぼれば嶽の観世音

みたれせ沼に あそぶ水鳥

と詠われており、嶽観音の祭礼（4月17日）には、近郷から盛装した馬を引き連れて、参拝に訪れ、屋上から蒔かれる、守札、供物の餅を拾い、それを馬に与えれば延命息災であるとし、大変な賑わいをみせていたようである。

嶽観音の現在の祭礼は、8月15日に行われている。

大善院のつぼたて

子供が泣いたり、駄々をこねたりしたときに疳^{かん}が起きたと云って、成岡の大善院で増立てをしてもらうことである。子供の両手の平に2ヶ所、腹のへそを中心に4ヶ所、背骨の左右に6ヶ所に字を書き祈祷する。その後、祈祷札で子供の頭から増の要所をさすることにより、疳の虫がでてくるといわれている。このように子供の体内に宿る虫を除去し、丈夫な子供に育つように祈る宗教的行事であり、昔は会津各地から幼児を連れた人が尋ねてきて賑わっていたようである。

五体構造を形成している重要な個体を体のつぼと呼び、このことから増立という話が生まれた。例えば幼児の掌の増に墨をつけ、これが終わると祈祷を行う。祈祷呪文が終わると、縦15cmくらいの2種類の祈祷札で頭部から増の要所をなでさすり、五体に靈感を感じさせ、そして、平癒に導くのである。この祈祷札には薬師の梵字が書かれている。

大根かじりまつり

成岡の頭屋まつりは、旧9月19日に旧成岡村鎮守に北野神社は京都北野天満宮から分霊を勧請したもので、もとは天神社と呼び他の天神様のように菅原道真の命日である25日が祭礼日になるべきものが、ほぼ稲の収穫が終わった秋の中の節供に行われるのである。また享保年間(1716～1734年)から300年以上も続く、各戸の長男のみが参加できるという厳格な仕来りで望む数少ない収穫祭である。

(一) 宵まつり

旧9月18日の夜6時頃になると氏子の女衆が頭屋の家に集まりオカラクを作る。オカラクはカラコのことである。奥会津地方では、オンノレ(御^{おんのり}糊)、県下全般にオシトギ(粢)のことでいずれもオ(御)を冠し神に供える餅を意味する。オカラクは純白にして無垢、清純なその姿は神に供えるにふさわしい生饅頭である。

オカラクに使われる米は、成岡の集落を見下ろす(上の山)と呼ぶ山麓の四畝歩ほどの「宮^{みやでん}田」を集落で所有し、その年の頭屋がオカラク田、ドブク田に分け、厩肥・金肥などの不浄の肥料を使用せず、山の檜葉を扱いた緑肥だけで耕作し、その収穫した米でオカラクを作る。

一斗五升の白米を臼に入れ、杵で叩いて砕き、篩にかけて細かい粉を取り、粗いものはまた臼に戻して叩くことを繰り返し製粉する。これを大鉢に入れ、水を加えて練り、起き上がり小法師のような形に、250個ほど餅に丸める。このようにして作られたオカラクは、まつりの神饅頭とするほか、本まつりの翌日に各氏子の家に幣とともに5個宛お護符として配られる。

(二) 役割

頭屋制

古い時代の神祭は氏子の中から神役を選んで主宰した「本頭・脇頭」「兄頭・弟頭」「大頭・小頭」などと言い、頭役・頭人・頭屋神主・1年神主などさまざまな呼び名がある。氏子神主である頭屋は宮座とともに特権制の世襲であったが、やがて氏族の増加分立に伴い祭祀主宰の特権制が崩れ、氏族の共同祭祀に解放移行し、中世ごろから世の変遷により村組の輪番による当番・順番・軒順まわりの制となる。

当番・当人・当家などという字になったのもそのあたりの経過によるものであろう。成岡ではオケット、チツェトと発音しているが、これは大きい頭、小さい頭のことである。大頭・小頭と言うこともあるしオトヤマツリとも言う。文字には「当家」とも見えるが旧檜原の八幡神社拝殿には田島と同じく「御党屋」と明記されている。

頭屋の家は神宿であるから、1年間家族共々潔斎して不浄を慎み、神社と境内の清掃・参道の雪踏み・注連縄張り・門松立て・神田の耕作・管理・収穫・祭礼の神社内外の清掃・神饅頭の準備、その他万端に奉仕し、かくて祭礼を迎える。もちろん、氏子神主であるから自ら祝詞も規式の通りに滞りなかった。しかし、近代になるとそれも不如意になり、専門の神主に委ねるようになり、現在に至っている。

もとは田島などでは神社祭典には氏子神主に代わって専門神職が裏から拝殿に入って祝詞を奏上し、終わってまた裏から退下したものであると聞いたことがある。現に成岡でも神職は神社の規式に先導し、御祓いと祝詞奏上する以外は、頭屋の神事はもっぱら頭屋が衣冠束帯の正装で主宰する。

(三) 祭礼

祭礼の当日になると、神職を先頭に、頭屋・社総代・区長が頭屋の家からそれぞれ神饌を奉持し、行器行列を組んで北野神社に向かう。神前に持参物を饌供した後、神職の修祓・祝詞奏上の後、頭屋を始め全員が玉串を奏典し礼拝する。それが終わると一同は、供物を下げて神前を退出し頭屋に戻る。これを氏子の代表参拝の意味で〈代参〉という。太鼓を合図に頭屋の家に氏子が参集するが、皆そろるのは3時頃となる。

頭屋の家では、床の間に北野、熊野神社の神号軸一対が掛けられ、その前に台を据え、昭和50年神社総代が定めた『神饌記』に従い、清酒を入れた行器と三宝にのせた葉付大根を始め、米・魚・果物・野菜など数々の神饌が御膳に盛られて備えられている。

直会の始めにオトワタシ（お頭屋渡し）の儀式が行われる。まず神前に向かって右（左座）に衣冠束帯姿の頭屋当人が、左（右座）に紋付羽織袴の来年の頭屋が相対座する。頭屋は神前に拝礼して立って、大根3本をのせた行器を奉持して「来年は誰々宅にお渡し下され」と告げる。これを来年の頭屋は座ったまま低頭して承る。これを三度繰り返す、オトワタシが終わる。頭屋順は軒順であるから女世帯もあるわけで、この場合は衣冠束帯はつけず江戸袷の正装となる。家を継ぐ男子がない場合は、代人は認められないので、男親が二度頭屋を勤める場合があるが、不幸^{ぶしあわせ}として嫌われる。

直会に入ると、神座から生大根二本を下げ、頭屋から氏子席にまわす。氏子はそれをかじって次々にまわす。両方からまわされるので都合二度かじることになる。このことから（大根かじりまつり）と呼ばれる。

(四) 頭屋移り

祭日の翌日は頭屋移りとなる。頭屋宅に区長・社総代が集まり、神号軸をはじめ行器・三宝・御膳・鍋・瓶その他頭屋道具を携えて来年の頭屋宅まで行列して行く。来年の頭屋宅では座敷を浄め、膳を揃えて一行を迎え、道具は引き継いで後に饗応接待する。この日、オカラクとお札と氏子各家に配り、これで頭屋を交代したことになる。

御前神社

- 所在地／下郷町大字戸赤字畑沢1697番地
- 勸 請／治承4年（1180年）9月『神社明細帳』
- 祭 神／紅梅御前靈
- 祭 日／旧9月18日

【由緒】

戸石村の御前神社は、いわゆる「高倉宮御伝記」にまつわる神社である。治承4年、高倉宮以仁王東奥潜行の時、王の後を慕い戸石村までやってきた王妃紅梅御前は、長旅の疲れから発病し、8月28日に逝去された。そこで、9月21日に、櫛戸村瀧王院加持のもと、紅梅御前の靈を御前靈社と崇め奉り、お祀りしたのが御前神社であると言われている。

神楽

神楽とは神事に伴う歌舞で、斎場に神座を設けて「にわび」を焚き、神々を勧請して行う招魂・鎮魂の神事芸能である。神楽を大別すると、宮中および伊勢神宮・賀茂神社で行われる御神楽とそれ以外の諸社・民間で奏される里神楽とに分けられるが、里神楽は、巫女神楽・出雲流神楽・湯立て神楽・獅子神楽の四種に分けられる。

◆ 三志神楽

〈名称と所在地〉

当町大字三ツ井で行われている神楽は伊勢系大神楽で三ツ井神楽または三志神楽とも言う。

〈行う時期と場所〉

毎年正月に、三ツ井地内の^{やすはり}安張・沢口・桑取火・磯上・^{しげんぎょう}志源行の5ヵ所の神社に奉納し、その後に各戸をまわる。

〈構成〉

演目は、通常（1）長獅子、（2）曲芸、（3）おかめ、（4）^{しょうき}鐘馗の無い、の四部構成となっている。

◆ 音金神楽

〈名称と所在地〉

獅子頭が130年前に作られたと言われ、音金平成4年に（1992年）2月23日、集落の有志が集まり、音金神楽研究会を発足した。本場と言われる只見町の梁取神楽の指導を受け、集落の長老から音金神楽の話を伺い、試行錯誤の活動をしながらも、下郷町特老ホームの慰問や当集落三倉山山開きには、その舞を奉納しているが、さらに研究を続けて伝承していくことを目標にしている。

〈行う時期と場所〉

下郷町特老ホームの慰問や当三倉山山開きなどには、舞を奉納している。